



ドラマ「ありふれた奇跡」

新年からドラマ「ありふれた奇跡」(フジテレビ系)を見ています。普段テレビのドラマを見ることはないのですが、毎週木曜午後10時の放送を楽しみに待っています。

理由は、山田太一さんの脚本であるからです。「ふぞろいの林檎たち」以来12年ぶりの連続ドラマだそうです。

ドラマの初回のあらすじはこうでした。

駅のプラットフォームに中年男性が1人で立ちずさんでいる。それを見た青年と若い女性は、彼に注視している。電車がホームに入って来る。若い男女は咄嗟に中年男性に掛けより、必死になって彼の行動を止めようとした。

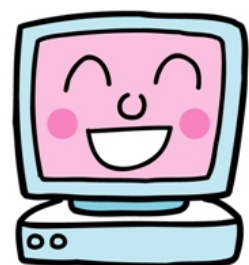
交番で中年男性は、いきなり彼らに抱きかかえられたと主張し、自殺行為ではないと言う。しかし、最後は若い2人にお礼を言うことになった。

後日、交番の巡査から若い2人に連絡が入り、中年男性と4人会うことになった。そこで中年男性から、若い2人に対して「どうして私が自殺しようと思ったのか」と問われることになった。その時、彼らは答えることをしなかったが、実は2人ともかつてそのように思った経験があることが分かった。

さて、ドラマはどのように展開されていくのか楽しみにして毎週見ているのです。

1月1日付け読売新聞に、山田さんのインタビュー記事が掲載されていました。今回のドラマにあたっての山田さんのモチーフが語られていました。

「僕はずっと犯罪ものを自ら封じ手にしてきました。犯罪なら、社会も歪みも描きやすい。でも、実際に犯罪に至る手前で踏みとどまる人の方が圧倒的に多い。ドラマチックじゃないかもしれないが、多くの人々の現実なら、それを書こうと考えてきた。自殺者が毎年3万人を超えるというのは、明らかに異常な時代です。今



回も、自殺する人ではなく、その寸前まで行き、もう一度生きようとする人たちの物語を書きました」

「僕が家庭劇を書き続けるのは、誰にとっても最後に残るのが家族だからです。家族には、自分では選べない『宿命性』があります。家族以外は『この人は仕事ができる』『美人だから』などと、自分にプラスかどうかを考えて付き合うでしょ。でも、家族は『なぜこの家に生まれたのか』と思っても、宿命性として背負うほかありません。その葛藤がドラマになり、時には救いにもなる。世の中の宿命性を知り、人生を深く考えるうち本当に願う幸福が見えてくるんじゃないですか」

山田さんみたいに洞察力を持って社会を見ているわけではないですが、少し立ち止まって社会や自分を眺めて見ることも必要なのでしょうか。そんなことを少し意識しながら「ありふれた奇跡」を見ているのです。

タイトルがいいじゃないですか。

奇跡 常識では考えられない神秘的な出来事。（「広辞苑」）

その奇跡が、私たちの身近にありふれている。奇跡を見逃していることもあるかもしれないが・・・。

興味のある方はご覧下さい。

